

石山合戦譚の成長

— 勸化本『信長軍記』をめぐって —

宮澤 照 恵

はじめに

元亀元年から十一年に及んで織田信長と石山本願寺とが争った石山合戦について記述したものは、『石山軍記』『石山軍記高砂録』『石山軍鑑』『石山退去録』『陰徳太平記』『紫雲殿由縁記』『集古雜編』『信長公記』『信長記』など数多い。この中には、信長の側から書かれたものもあれば、真宗の側から記述したものもある。軍記・合戦記として纏められているものも多いが、真宗各派の僧侶が信徒を前に語る説教の台本とも言うべき勸化本の類も見いだされている。本稿は、この種の勸化本の一つである『信長軍記』の紹介を兼ねて、その性格を明らかにすることを目的とし、併せて先行軍記や『石山退去録』『石山記』等と比較しながら、勸化本における石山合戦譚の発達成長を跡付けようとするものである。

一

『信長軍記』^①（上総舎藏本）は石山合戦を真宗の側から記述した勸化本の一つである。同様のものに『石山

『退去録』、『石山記』が公刊され、『石山軍記』、『石山軍記談林勸考』、『石山軍記高砂録』等の存在が報告されているが、それらがいずれも江戸時代後期のものであるのに対し、『信長軍記』が宝暦四年の年記を有し、西派（本願寺派）の勸化本の初期の形態を残している点で注目されるものである。

『信長軍記』は、石山合戦の二十余の話材をほぼ年代順に漢字片仮名交じり文で綴り、話の節目々々に同行衆への語りかけ（結勸）が記されている。本文の書写は墨一筆でなされているが、後に本文とは別筆の墨筆で本文の訂正・書き換え・振仮名の追加が行われ、さらに、朱筆で本文訂正・振仮名・合点・朱引が加えられている。巻末には本文と同筆で

宝暦四戌五月廿四日

と記し、これとは別筆で、

釈旭雲坊手形

芸陽賀茂郡志和庄奥屋村吉益氏本

とある。さらに又別筆で

明和二ヨリ改品秀寺什物

とあり、そして最後に

明治元年ヨリ改／明円寺什物

と伝領識語を記している。

品秀寺の識語により本書が明和二年以前の書写であることは明らかであるが、さらに、『釈旭雲坊手形』以下の二行を、吉益氏が所蔵するに際し本文の書写者が旭雲坊であることを念書したものと解すれば、宝暦四年の書写と認めることができるのである。

なお、安芸国賀茂郡志和庄（広島県東広島市）は毛利家臣天野氏由縁の地、品秀寺は安芸国安芸郡畑賀村（広島市安芸区瀬野川町）、明円寺は安芸国豊田郡榎梨村榎梨（広島県賀茂郡大和町）の寺院である。

『信長軍記』は内容的には、合戦の直接原因——信長の石山讓渡要求と本願寺側の拒否——から説き起し、ほぼ合戦の経過に沿って描かれ、信長の急死で終わる。ただし、内実は虚実とりまぜたもので、「仏敵法敵の信長」の軍勢と戦う本願寺勢の戦況描写の他に、「了西」や「御真影」等になつたる奇瑞譚が描かれている。この書と『石山退去録』『石山記』等の間には、話材の出入りや細部の異同等が多々認められる。本稿では、それらの比較を通して『信長軍記』の成立を考え、勸化本石山合戦譚の成長過程を跡付けてみようと思う。なお、『信長軍記』に遅れて成つた実録体小説『石山軍記』を始め関連諸作品と勸化本との交渉については、別の機会に譲る。

二

以下、『信長軍記』の内容を仮の章題によつて『石山退去録』『石山記』『陰徳太平記』と比較した対照表を示す。表中で「」で囲んだものは、それぞれの書の目録小見出しをそのまま示したものである。また○と●は対戦(一騎打ち)の勝敗を示す。

信長軍記	石山退去録	石山記	陰徳太平記	史料その他 ³⁾
信長の寺地所望と合戦準備	信長の寺地所望と合戦準備	本願寺縁起 信長の寺地所望と合戦準備	信長の寺地所望と合戦準備	頭如書状 (明性寺文書他)
了西身替わりの名号 奇瑞	←後出	←後出		康楽寺靈宝 遺徳法輪集

中の島合戦	春日井堤合戦 元龜元年九月十四日	「中島合戦」	「信長被攻本願寺事」	信長公記 集古雜編
野村越中守討死 天満陣營炎上 信長川口に退く	●野村越中守討死 ○島与四郎	●野村越中守討死 ○島与四郎	野村越中守討死	金鑑記
池沼戦 十八日(第二戦)	石山総攻め 九月 十八日(第二戦)	石山総攻め (第二戦)	「中島合戦ノ事」 (第二戦)	
	●摂州辻之助討死 ○根領万治 辻之助跡目に文 島に褒美	●摂州辻村助討死 ○根来万治 辻村助跡目に文 島に褒美		大谷本願寺 由緒通鑑 伝願正寺蔵
江口の戦い 信長 京へ	信長 美濃へ	江口の戦い 二十二日 信長京へ	江口の戦い 二十二日 信長京へ	信長公記
顕如法事 (二十五日より 七日間)	顕如法事 (九月二十五日〜 十月四日)	顕如法事 (九月二十五日〜 十月二日)	顕如法事 (九月二十五日 より七日間)	
	願誓寺専秀春日井堤 にて信長軍の墮地 獄の様を見る	願誓寺専秀春日井堤 にて信長軍の墮地 獄の様を見る		

毛利へ援軍依頼 三上七郎右衛門丞を 受ける			信長諸国門徒攻撃 ←後出 頭如諸国へ羽檄
	天正五年春 信忠による兵糧攻め 孫一の子豊若石山へ 出立(十五歳) 豊若入獄難儀と祖師 の名号奇瑞 天正五年三月七日 信長石山総攻め ○豊若(初陣) ●藤田蔵討死	天正五年春 信忠による兵糧攻め 孫一の子豊若石山へ 出立(十四歳) 豊若入獄難儀と祖師 の名号奇瑞 天正三年三月七日 信長石山総攻め ○豊若(初陣) ●藤田蔵討死	十月二日 ←後出 信長諸国門徒攻撃 天正三年八月十五日 越前攻め 頭如諸国へ羽檄
			十月二日 信長諸国門徒攻撃 天正三年八月十五日 信長越前攻め 頭如諸国へ羽檄
			信長諸国門徒攻撃 天正三年八月十五日 信長越前攻め 頭如諸国へ羽檄
吉川家文書		集古雜編 (奉行の状他)	信長公記 朝倉記 専福寺文書 他 頭如書状 (慈船寺文 書他)

←後出	天正三年八月十三日 信長越前攻め →前出	毛利兵糧運搬と 船軍 村上八郎左衛門活躍 ○毛利軍・鈴木孫一 ●九鬼・間鍋等 児玉高砂の松を伐る ……病死	摂州十艘川合戦 比ノ河原兄弟	天正四年四月十四日 天満攻め
	信長越前攻め 了西身替わりの名号 奇瑞	毛利三家兵糧運搬と 船軍 ○村上・児玉 ●九鬼・沼野等 児玉高砂の松を伐る ……不思議 梶かけの名号奇瑞		
天正三年三月 摂州十艘川合戦 北ノ河原兄弟 荒木村重	信長越前攻め(再出) 了西・吉川金吾身替 わりの名号奇瑞	毛利三家兵糧運搬と 船軍 村上八郎左衛門討死 ○児玉 ●九鬼・間鍋等 児玉高砂の松を伐る ……不思議 梶かけの名号奇瑞	→前出	「摂州森口表并天王
天正三年三月 摂州十艘川合戦 北ノ河原兄弟 荒木村重	→前出	毛利三家兵糧運搬と 船軍 村上八郎左衛門討死 ○鈴木・児玉・村上 ●九鬼・間鍋等 児玉高砂の松を伐る ……病死	→前出	(天正四年四月) 「摂州森口表并天王
信長公記		毛利輝元感 状 毛利家文書	他 児玉家文書	信長公記 吉村文書

和陸	天正八年三月五日	祖師真影の奇瑞 作間の謀を免れる	顯如登櫓・旗・早鐘 三上七郎右衛門	天正三年五月五日 則空の加勢	石山総攻め →前出	五月三日 ●原田備中守討死 ○益田少堅
和陸		←後出	顯如登櫓	←後出	天正七年六月 石山総攻め 原田備中守討死 池田惣七・根来小 密茶	←後出
和陸		祖師真影の奇瑞 佐久間の謀を免れる	「天王寺石山所々合 戦事」	顯如登櫓・旗・早鐘	石山総攻め →前出	寺合戦事 ●原田備中守討死 ○益田少堅
和陸	天正六年	祖師真影の奇瑞 佐久間の謀を免れる	「天王寺石山所々合 戦事」 天正四年六月十四日 天正七年三月十日	顯如登櫓・旗・早鐘	石山総攻め →前出 (六月)	寺合戦事 五月 ●原田備中守討死 ○益田少堅
信長公記						専光寺文書 長寿寺文書 兼見卿記

→前出		光秀謀反の理由	信長自害	小田三七 鷲の森攻 撃の準備	教如 籠城と降和 勘当		三上に形見	起請文 勅使下向
天正四年五月六日 合戦に則空の加勢	〈付説〉	←後出	信長自害	丹羽軍 鷲の森攻 撃の準備		天正八年四月九日 石山退去		羽柴・荒木失敗 勅使下向
			信長自害	神戸三七郎長秀鷲の 森攻 撃の準備	教如 籠城と降和 勘当	三月九日 石山退去	起請文	天正八年正月奏上 羽柴・荒木失敗
文禄元年頭如入滅 東西分流 本願寺の移転		光秀謀反の理由	信長自害		教如 籠城と降和 勘当	石山退去	起請文	
			兼見卿記他	明智記 集古雜編	表裏問答 集古雜編他	信長公記 頭如書状 (勝興寺文 書)他	起請文	頭如書状

→前出 →前出	天正八年 祖師真影の奇瑞 光秀謀反の理由 高野山徒 信長調伏 不動明王の靈験	→前出 →前出	→前出 →前出	
------------	--	------------	------------	--

三

続いて、右の表をもとに諸書を比較して、合戦譚の成長過程について考察を行う。
まず諸本の紹介を兼ねて成立時期とその関係を概括すれば次のようになる。

- ①『陰徳太平記』（万治三年以前成立の『陰徳記』を増補整備して元禄八年自序・正徳二年刊）に準拠した石山合戦譚が早くから岩国吉川氏・安芸毛利氏周辺に広まり、西派で語られていた。
- ②その合戦譚を圧縮したものに、参軍した者の記録——覚え書き——及び教団内部の伝承を加えて、『信長軍記』の原形が成立した（元禄期に溯れるか）。
- ③『信長軍記』は、この聞き書きに説教者による勸化部分と一部虚構（後述）を加えて、宝暦四年に書写された。

④『石山記』（写本一冊、安藤氏蔵）は、版本『陰徳太平記』の抜き書きに『石山退去録』に近い勸化本の内容を併せたもので、西派のものである。巻頭に「夫御当家ノ御本山本願寺御門跡ハ各々御存シノ通今ハ京都西六条堀川ニ御堂御建立有テ他力念仏ノ一道今盛ンニ御弘メナサル」とある。「信長御門徒ヲ責

メラル、之事」の章末に「已上陰徳記四十七卷ノ終」と同筆による書き入れがあり、合戦部分等が『陰徳太平記』に拠っていることを裏付けている。鷲の森攻撃の大将を「神戸三七郎」とするなど東派の説教の影響も混入しており、成立時期は下る。

⑤『石山退去録』（写本一冊、享和二年書写、竜谷大学図書館蔵）は、『信長軍記』の流れを汲むものである。結勸部分が地の文に混入し、語りの姿勢が顕著である。合戦よりも奇瑞譚に力点がおかれ、誓書・書状といった直接資料はなくなる。教如については全く触れられない。以後勸化本石山台戦譚の内容は定着し、整合される。

⑥『石山軍記高砂録』（写本一冊二巻、享和三年書写、竜谷大学図書館真鍋文庫蔵）は、奥付に「維時聖代歴享和三癸亥歲次天晚春三月／十有五月初夜与利石山軍記高砂於善立ノ寺物語砌勸弁古注増補校合為二巻也／三月二十四日中午飯後書調之終者也和州ノ宇陀山人恵日山養善寺住持僧釈達洞記」とある。文体は「サシ物モヒラメク空や紅葉ノ秋ノ最中ノ竜田河錦ヲ流ス浪ノ音ヒ、ク太鼓や具金ノ音モ殊勝ニ五万余騎……………」のように流麗な語りが特徴的で、結勸部分は見られない。初めから信長は「信長公」と書かれている。

⑦『石山軍記談林勸考』（写本一冊、後小路氏蔵）は「但馬福成寺述」とある。福成寺は幕末の著名な説教僧大仙であることが後小路氏により指摘されている。⁽⁵⁾ 結勸部分は無いが、無駄が無くまとまりの良い勸化本で、全体が十回分に分けられている聞き書き本である。二冊本『石山軍記』（写本二冊、後小路氏蔵）もこれに近い。

⑧内容・分量共に⑦に近いと思われるものに、次の二書がある。

『大坂石山軍記』（写本一冊、大谷大学図書館林山文庫蔵〔宗大八二二五—一〕）。漢字平仮名交り文で全体が十五段に分かれる。

『石山軍記』（写本一冊、同大同文庫蔵〔宗大—一〇五五〇—一〕）。上中からなる有欠本で本願寺縁起を

巻頭におく。

以上、勸化本の諸本を比較すると、『石山退去録』を一つの境として、それ以降は話材が定着し、教化・布教・自派の拡張といった説教本来の目的から離れて、個々の説教僧の語り口が競われていくように思われる。以下の論をすすめる前に、これまで概観した勸化本諸本が同系統であることを、一・二の例で確認しておく(なお『陰徳太平記』と勸化本との関係は項を改めて述べることにしたい)。

例えば、『信長軍記』に見られる

出家ハ肉ヲ裂眼ヲヲテモ人カ望ハ叶ル習

1ウ(本願寺の拒否回答に接した信長の発言)

釈迦ニ提婆カ敵對シテ正法弥々繁昌シ、太子ニ守屋カ有テ仏法弥々栄へ、

24ウ(加勢に訪れた則空の

顕如上人に対する発言)

善人ノ敵ト成ルトモ悪人ノ友ト成ナ

10オ(結勸部分)

などの故事・諺を利用した表現に注目すると、諸本の共通性が浮かび上がる。さらに諸本が光秀謀反の理由を、蘭丸の所望した近江国志賀郡の所領をめぐる怨恨であるとしているのは、他の文献に見られないものである。

任意の例を挙げたが、構成・表現共に重なる点が多く、諸本は同一系統のものであると断じてよからうと思ふ。

四

先に諸本の成立時期と相互関係を概括した際に、原『信長軍記』の成立に『陰徳太平記』に準拠する聞き書きや抄録の類が関わっているらしいことを述べた。そこで、ここでは『信長軍記』と『陰徳太平記』の関

係を検証しておく。

まずはじめに、大坂籠城者の内訳であるが、軍大将三十七人の名は、表記上の問題を除けば、両書で完全に一致する。寺院門跡五十二寺については、掲載順序の異同が目につくが、『陰徳太平記』に「信楽寺」が加わる他は、両者に明確な違いは見出されない。(同じ箇所を『石山退去録』で見ると、軍大将では十六名が削られ、新たに二名が加わっており、寺院門跡では二十寺院が削られ、五寺が加わっている。)

同様に中島合戦の後、美濃願誓寺が信長側の首を検分する条を見ると、示された十八の名は全て照応する。(なお『石山退去録』にはこの条は無く、『陰徳太平記』を利用した形跡のある『石山記』では一部順序が入れ替わっている)

右の二例は、『信長軍記』と『陰徳太平記』が人名寺名の記録において共通性が高いことを示している。次に、合戦場面における両者の近似性を考察しておく。まず第一戦の結末部分では、「天満退去」の後次のようになっている。

『信長軍記』

然ルニ信長ノ本陣(陣) 天満ノ森へ本願寺ノ
且(且) 那透間ヲ見テ火ヲ付ケレハ猛火天ヲ焦
シ時ノ間ニ焼ケ落タ 信長モ是ハ大事也ト思
ハレ本庄ノ向フ河口ノ城ニ引レテ其日ノ軍ハ
終タト有ル 5ウ

『陰徳太平記』

信長の本陣天満の森へも處の者共紛れ入りて
火を放ちければ、猛火天を焦して焼け上り、
又一揆共所々より蜂起して鬨を作りどよめき
ける間、寄手裏崩して騒動せり、信長もかく
ては大事也と思ひけん本庄の向うなる河口
の付城へ引取り給ふ

卷四十七「信長被攻本願寺事」

右の部分は、『石山退去録』『石山軍記談林勸考』『石山軍記』(林山文庫本)等では「天満退去」で終わっている箇所である。この他の部分でも、『信長軍記』と『陰徳太平記』の合戦の流れは共通性が高い。合戦描写については両書の精粗の差は大きい、共に本願寺側の戦術が描かれる点で興味深い。例えば、石山総攻めの軍法について、両書共に「鉄炮」「五重の棚逆木」「五間の障」「惣堀」「浮武者」の作戦を説いているのは、そのよい例である。

本願寺ノ軍法ハ先ツ「出」、城々軍丘(兵)ヲ入増シ、鉄炮ヲ多クカマヘ石山ニハ棚逆木ヲ五里(重)ニ付ケ其内ニ渡リ五間ノ、カラ堀ヲ、ホリ其後ロニ、惣シテ堀ヲホリ城中ニハ、軍兵、六万騎入ヲキ、扱又浮武者ト云テ、一ト手ニ千騎ツ、尤、七組二分(ケ)テ、第一番ニ、下間三位ニ千騎ノ軍兵ヲ相□□、第二ニ八木駿河守、三ニ鈴木孫市、第四ニ同一南、五ニ八田辺平次、六ニ根来小蜜茶、第七ニ山田新助都合七千騎ヲ七手二分是ハ、一軍ツ、ニ敵ヲ引奇(寄)セテ、難所ニテ勝負ヲセント云謀り事 23 オ 23 ウ

蓋し軍法は先づ出城くゝに軍士を加へ益し、就中鉄砲多く構へ置き、さて石山の城には棚逆木(サクサカモギ)を五重に付け、其内に徑り五間許りの障(カラボリ)を深く穿り、其後に又総堀あり、城中には総軍六万騎、其中に下間三位、八木駿河守、鈴木孫市、同一楠、田辺平次、根来の小蜜茶、山田新介等を大将として、究竟(クツキヤウ)の兵七千余を拵み出して、浮武者と定め、敵に懸つて一戦して引き取り、呼引(ヲビキ)よせて、地の利に就いて戦ひを決せんと也 卷五十三「大阪大寄之事」

次に『陰徳太平記』卷五十三「摂州森口表並天王寺合戦之事」及び「原田備中守戦死事」の両条に該当する部分について見ると、『信長軍記』は『陰徳太平記』の半分の量ではあるが、本願寺側の他の資料には見ら

れない話材を載せている。ここには「原田備中守」の描写に原田側の視点が垣間見られる点で、注目されよう。以下、その一部を引用しておく。

然ルニ信長、原田備中ノ守カ度々打負シ、注進ヲ聞テ、信長モ齒カミヲナシテ、原田ノ大臆病者、其方ヲ天王寺ニ居テハ、又城ヲ落シ、敵ニ力ヲ付ルニ依テ、天王寺ヘハ作間、宇右衛門新(親)子ヲ置、原田ヲハ、永岡兵部(衛)門、荒木摂津守ノ手ニ付テ、天王寺ノ付城ノ普清(請)奉行ヲ致(セ)ヨト云付ラレ、原田ハ面目ヲ失ヒ、良等(郎党)ニ向テ汨ヲ流シ、吾レモ近年、処々ノ軍ニ高名ヲ顕セトモ、誠ニ武軍(運)ノ尽キニヤ、此度打負ケタレ、信長公ヨリ普清奉行ヲ云付ラレ、面目無キ次第ナレハ、手勢計ニテ討テ出、諸人ノ目ヲ驚ス軍ヲハシテ、討死ニセント思フト申ケレハ、皆々御尤ト汨ヲ流タト有 20ウ

(三八)

信長は堪(コラ)へぬ荒大將にて御坐せば、原田が両度の敗績の注進を聞きて大きに忿りをなし給ひ、かゝる大臆病者天王寺に籠めたり共、又陥れられて彌(イヨ／＼)敵に力を付くべきぞ、天王寺には佐久間父子籠り候へ、原田は長岡、荒木等が手に従ひて、大阪勢を押へて天王寺付城の普請堅固に經營せよと下知し給ふ、原田是を聞いて吾が陣所に帰り、家の子郎等召し集め、先づ汨を雨落(ハラ／＼)と流して、吾近年所々に於て勇名を顕せし事は、世以て知る所也、然るに今度は天運の加護にや離されけん、両度の軍に負を取りぬ、之に依て信長公、天王寺の在番をば、佐久間に命ぜられたり、今は、や何の面目に人前の言語を成すべきや、如かず手勢を以て大阪へ押し寄せ、諸人の目を驚かす一戦して、討死せんと思ふ也、最後の有様能見置きて、故郷に帰り妻子共に語り候へと云ひければ、

次は、信長の寺地要求に対し、本願寺側が拒否の返答をしたのに続く部分である。

卷五十三原田備中守戦死事

皆多年の御厚恩何報じ申すべきや、此度御供仕りて戦死仕り、冥途九重の外迄も君臣の義を立て候べしとぞ申しける、

信長……………大ニ怒リ大坂へ押寄願如父子ヲ

討亡シ地奪ヒ取トハカリ事也 其比切利支丹ノ宗門日本ニ渡リ諸人ヲ邪ニ入真宗ヲ受ケズアマサヘ京大坂堺ヒ近江越前等數度命(論)

義シ公義ヘ訟ヘ坊主ヲ殺害ス 彼ノ信長等真

宗ヲ讒言ス 故二本(願)寺ヲ責メ亡シテ願

如ノ首ヲ落シ寺地ヲ取ト思フ 然レトモ真宗

ハ他宗ト違ヒ門徒末寺信心也 志ヲ一致ニシ

テ石山ニ楯(タテ)籠ハ大事也 面向キハ三

好ノ一揆ヲ責ル フヒニ大坂ニ押寄セ一戦ニ

責落ト被下(オウセラレ)タ 1ウ2オ

信長……………大きに怒り給ひ、如かず大阪

へ押し寄せ願如父子を打果してこそ、彼の地

を奪ふべけれどとて、犇(ヒシ／＼)と内議評

定せられけるが、彼の宗旨は門徒信心堅固な

る事他に異なれば、若し志を一致にして楯籠

(タテコモ)らば由々數大事なるべしとて、

野田福島の城を攻むるに託して不意に本願寺

を攻めんとぞ擬せられける、

卷四十七「信長所望本願寺事」

『信長軍記』では、信長の怒りの文脈に「其比切利支丹ノ宗門日本ニ渡リ……………信長等真宗ヲ讒言ス」という一文が挿入されているため、文脈の乱れを生じている。さらに讒言した主語が不明確で、唐突に切利

支丹が出て来るのも不審であり、何らかの手違いがあつたと言わざるを得ない。^⑦この手違いを解く鍵が『陰徳太平記』巻六十三にある。すなわち、和睦の条で、本願寺側の評議の中に信長への不信を述べる次の文がそれである。

(四〇)

抑も信長當寺を亡さんと欲せらる濫觴は、近年貴利支丹の宗門日本に渡り、諸人を邪法に進め入る、然るに真宗渠（カレ）が勧めを受けず、剩さへ京、大阪、境、近江、越前に於て数箇度論議に及び、公儀を経て彼の坊主を殺害す 之に依て彼のイルマン共信長へ真宗を讒言せし故、當宗を滅さんと企て給ふ 巻六十三「勅使下向于大阪附信長本願寺和睦事」

右の文を踏まえることにより、初めて先の『信長軍記』の「切利支丹」以下の文意が通じる。このことは、逆に作者の側から言えば、『信長軍記』の作者は、先に示した『陰徳太平記』の巻四十七と、この巻六十三の記述を合成圧縮して、信長の本願寺攻めの動機を描き出したと言えよう。但し、合成圧縮するにしては、『陰徳太平記』の二つの巻が離れ過ぎていてではないかという疑問が残る。『石山争戦記』（竜谷大学図書館蔵）のような、『陰徳記』の中から石山合戦部のみを抜き出した写本を参照したとも考えられるが、それと同程度に、この切支丹・真宗間の争議を石山合戦譚の発端に置いた異本『陰徳記』、或いは『陰徳記』に進拠した勸化本の存在も、可能性として考えられよう。

以上『信長軍記』と『陰徳太平記』との関係について検討してきたが、これは先に述べた諸本の相互関係を裏付けるものである。

五

諸本対照表に示したように、『石山退去録』をはじめとする勅化本では『信長軍記』や『陰徳太平記』と比較して、説話の膨らみ、奇瑞譚の成長が著しい。石山合戦における靈異譚は、『陰徳太平記』一話、『信長軍記』三話、『石山記』五話、『石山退去録』七話を数える。その内訳を示せば次の通りである。

	信長軍記	石山退去録	石山記	陰徳太平記
了西身替わりの名号奇瑞	○	○	○	
満誓寺専秀地獄を見る不思議		○	○	
豊若祖師名号に助けられる		○	○	
児玉梶かけの名号		○	○	
則空の加勢		○	○	
本願寺祖師御影の凶瑞			○	○
不動明王の靈驗		○		

『信長軍記』に掲載されている三つの奇瑞譚のうち、則空の加勢については『紫雲殿由縁記』⁽⁸⁾に、了西身替わりの名号については正徳元年刊の『遺徳法輪集』に記載があり、いずれも教団内部の伝承として定着していた可能性が高い。残る祖師御影の凶瑞についてであるが、この話は管見の範囲では『陰徳太平記』が初見で、同書巻五十三に

(四二)

同五年より七年に至りて、佐久間父子数回夜討をかけ、忍の者を入れたりけれ共、大阪城中、或時は開山の御影に汗流し、又は影供の御飯二つに敗れたりければ、諸人は是れ凶瑞を示さるゝ也と前知して、用心厳しくしける故、一度も不意を討たれず、却りて敵を討つ事衆多也、

卷五十三「大阪所々合戦之事」

とある。『石山記』では多少の異同はあるものの、ほぼ同じ内容であり、遅くとも正徳期までには巷間に伝わっていた話と考えられよう。この部分、『信長軍記』では、

作間カ、謀事ニテ、本願寺へ一人ノ、老人カ、一ノ箱ヲ荷テ、来リ関処テ、私ハ、播戸（磨）ノ者テ御座ル、近年来リ、小田信長カ仏敵ト成リ、本願寺ヲ責ラレ、私モ御ヤクニハ立ストモ、法敵ノ、信長ニ礫テ、一ツ成トモト存シタレトモ、老人ノ事ナレハ返テ、足手マトヒト存今迄参上不仕、此度難ヲ免玉フ御喜ニ参候、関処ヲ御通シ被下ヨト云ヘハ、イヤ、大事ノ、時分ナレハ、鹿末（末）ニハ通サヌ、箱ヲ改メヨト云ケレハ、箱ニハ本山へ御喜ノ御シウ儀トシテ、銀子ノツ、ミヲ、其ノ箱ニ一盃結（詰）テ有ニ依テ、関処ヲ通シ、善知識ニ御對面申シ、御盃共ヲ被下タ也 然ニ、善知識ヲ初メ、御堂衆、初夜ノ御勤メ、何事モ無ヒニ、開山ノ、厨子ノ錠カ明タ——、上人御戸開テ、御ラン被成レハ、御首ヨリ、汗カ流、御カタヨリ、ナテ下シテ見玉ヘハ、人ハタニ成テ、胸サハギカ被成、是ハ、不思議——老人ハ、作間宇右衛門カ、謀事——ケ様ニ、凶事ヲ、ノガレ玉ヒタモ、道理カナ、御真影エハ、御念ヲ御残シ被成、御首ハ、六十一歳ノ時、御作り被成、弥（イヤ）女様ヘユヅリ玉ヒ、是ハ、末（末）代ニ、入事カ有、其為残シ置タト、御ユヅリ状ニ、身贄（替）リニ、トラセテ、ユヅリ渡ス者也、ユメ々、サマタケニ、ナス不可、御身軀ハ、九十歳ノ、御姿、文永九年、大谷ノ御廟改葬ノ時 28ウゝ29ウ

と一丁分程に膨らみ、省略された形ではあるが御真影の伝領にも筆が及んでいる。ところが、『石山退去録』になると、伝領部分が削られ、一方で総字数が二倍程に増えている。これは凶瑞の後に露見した佐久間の謀の説明や同行衆への結勸部分が膨らんだためである。三つの文を並べて見ると、一つの奇瑞譚が、おぼろげな言い伝えから、一回の説教の主な話材となるだけの独立性を獲得していく様をうかがうことができる。

同様な例が見玉梶かけの名号奇瑞にも指摘出来よう。つまり『兵糧搬入の帰途、高砂の松を伐った見玉が程なく急病死した』という『陰徳太平記』や『信長軍記』の記述が、その後住吉信仰に結び付き、「見玉は松を伐った筈で、海難に合うが、名号の奇瑞によって九死に一生を得る」という名号賛美の話に成長していったのである。

さて、享和二年書写識語のある『石山退去録』以下、幕末の『石山軍記談林勸考』に至る勸化本では上述の奇瑞譚が定着し、説教の中心話材の様相を呈している。つまり、『信長軍記』の原本成立頃の説教では、石山合戦そのものが「護法の戦い」として門徒の教化に結び付いていたが、説教の場の広がりと共に、そうした信仰に依拠した論理だけでは聴衆を魅きつけられなくなり、より直接的な信仰奇瑞譚が成長していったものであろう。このことから推せば、『石山退去録』全編の五分の一に及ぶ豊若譚なども、稚児物語・初陣譚の要素を兼ね備え、整い過ぎていくだけに、かえって後人の手によって作られた感が強い。史料の裏付けがないことも考え合わせると、どこまで溯れる話か疑問が残る。

時代が下がるにつれて、奇瑞譚が量・質共に増加し、整ったものになったことを述べたが、石山合戦譚の内容の変化は奇瑞譚だけにとどまらない。合戦描写においても、英雄の登場や、戦場での装束描写とそれに続く一騎打ち、といった聞かせ所、語りの山場が作り上げられていく。その一方で、それまで教化手段として有効であった門徒の献身的懇志や死を辞さない戦いぶりは削られていくのである。

勸化本の変化成長は「仏敵・法敵の信長」にも及んでいる。一例として信長が和睦を求めて正親町院に奏

した内容を、『信長軍記』『石山退去録』『石山軍記談林勸考』の三書で比較してみる。

『信長軍記』では次のようになっている。

某シ、信長カ、本願寺ト、弓箭ヲ争ヒシニ、然レハ、門跡ニ叡慮ヲ被加、信長カ下知ニ、従ル、由ノ、和融ノ、勅定ヲモ、可_レ被_レ下ニ、左様無キ事ハ、且ツハ、天子ニモ、門跡ニ、荷担、被_レ遊カト奉_レ疑然ハ、信長、朝家、恨ミ可_レ奉ト、アラ_レシク、奏聞致サレタレハ、

30ウ

これが『石山退去録』では

近年、石山本願寺ト不和ニシテ、合戦度々ニ及候ヘドモ、未ダ勝利ヲヘ(エ)ズ。マコトニ王城間近ク恐多シ。別(シ)テハ、トキノ変モ難計。何トゾ和睦仕度候ヘドモ、多年ノ意赴(趣)、私ニハト、ノヘ難シ。アワレ、勅定ヲ以テ、和睦仕度ト委細奏聞トゲラルレバ

33ウ

となり、信長の正親町院に対する態度には大きな変化が見られる。さらに『石山軍記談林勸考』では、

和睦ヲ御計ヒ下サルヘシ若時ノ変ニ及ハ、王城寛東ナシ是ニヨリテ和睦セント存スレトモ多年ノ意赴(趣)ヲ申立和睦ト、ノヒ申サスアワレ勅ヲモテ和睦仕度ト願ヒ入ラレケレハ

第九會 54オ

と和らいでいく。この傾向は信長自身の呼称にも当て嵌まる。『信長軍記』では全巻を通じてあくまで仏敵・法敵の「信長」であつたのが、『石山退去録』になると一部に「信長公」と見え、その動作にも「ラルル」「玉フ」と敬語表現が用いられる箇所が見える。信長に対する激しい敵意・批判が、時代の要請で容れられなく

なつたこともある。また、説教自体が唱導僧を通じて教団外部に広まっていたことも、こうした激しさが影をひそめた一因であろう。

『信長軍記』に見られた教如批判が『石山退去録』以下では削られてくる。或いは東派で語られていた話が、西派の勧化本に採られるといった大きな流れが見られるが、これらは教団内部の規制だけでなく、右に見てきたような説教自体の役割の変化によるところが大きいと言えよう。

六

『信長軍記』は、その合戦描写において『陰徳太平記』からの影響が強いこと、及び奇瑞譚については周知の話が掲載され、さほど膨らみが見られないことを示した。それでは、早い時期の説教には独自の虚構や編纂意図はなかったものであろうか。この点について検討しておきたい。

『信長軍記』のみに描かれる話として、諸本対照表に見るように三上七郎右衛門の事蹟がある。毛利家の侍大将の一人として三千騎の援軍を率いるのであるが、彼の場合に限って出立の際妻子と盃事をし、本願寺に到着すると、彼の率いる軍兵が願如と対面して盃を受ける。戦場では名乗りを上げて活躍し、あまつさえ和睦後には上人から形見を受けることになる。その形見たるや、「靈宝の祖師木像」「祖師名号の一幅」「子孫に至るまで内陣を約した添状」の三点である。寺宝である木像を一個人に与えることは、まずあり得ないが、祖師名号についても同様のことが言えよう。

一方、同じ毛利軍の中で、三上が活躍するのとは対照的に、梶かけの名号伝説で著名な児玉の影は薄い。『信長軍記』における毛利軍の扱いの、この奇妙なアンバランスには、説教者の立場が反映していると考えられよう。さらに、三上の話は一連の合戦の流れに、後から挿入された節がある。

すなわち、三上の参軍を一丁半にわたって述べるために、毛利側への兵糧援助依頼とは別に援軍依頼を描

き、和睦後には顕如上人の「鷲の森退去」への言及を省いてまで三上への報償に筆を費やしているのが、それに当たる。この三上に關しては、『信長軍記』で「三上の子孫が今に長州で三上七郎右衛門を名乗っている」と記すが、本願寺側・信長側・毛利側・児玉家・安芸真宗寺の何れの史料にも名前を見出す事が出来ない。以上のことを勘案すると、「長州の三上家」に陣中名号の話が伝わり、その家が説教僧、あるいは旧藏者と何らかのつながりがあったと推測できようか。このことは、聴衆や説教者の立場による虚構がその場に依じて説教に加えられるといった可能性を示す一つの例といえる。

三上の話が説教者あるいは聴衆の立場を反映して挿入されたものとすれば、山本甚之助なる人物の創作も同じ流れに位置しようか。山本は

元トハ、出雲尼子ノ家老テ有タカ、藝州吉田ノ郡山ノ城主毛利照元公ヨリ尼子滅サレ家老ノ甚之助ヲハ生ケ取りニシテ牢獄ヘ打込レタカ牢拔ヲシテ信長ニ抱ヘラレタ者デヤ 10ウ 11オ

と経歴が描かれる人物で、信長の軍師として諸国門徒の攻撃を提案し、合戦の流れを大きく変えるきっかけを作っている。『陰徳太平記』や『石山軍記』では、この進言は羽柴、滝川等の信長側近によつてなされる。この人物も諸史料に見当たらない。恐らく、尼子の「山中鹿之助」に、武田の軍師「山本勘助」を足して創り出した架空の人物であらう。いずれにしても尼子の家臣を信長の軍師に据えたことは、『信長軍記』が安芸毛利の膝元に伝わった本であることを考え合わせると興味深い。

さらに、「信長の対戦相手の三好一族が、実は開戦時に本願寺側を装い、裏で信長に通じていた」とするもの『信長軍記』のみに見られる記述であり、注目すべきである。

以上の三上（毛利）、児玉（毛利）、山本（尼子）、三好の扱いを見ると、初期の説教には時代が下がるに従つて姿を消して行く武家門徒の存在が色濃く反映しているように思われる。

さて武士の扱いはそれとして、門徒の描写にも説教者の立場が反映している。例えば、第二戦で討死した下辻村之介の話は『大谷本願寺由緒通鑑』に載り、遺族に下賜された御文は、摂州願正寺に伝わるという。教団の危機に対する一門徒の勇敢な戦いと死及び上人の手向けは、布教手段として効果的な材料であり、『石山記』『石山退去録』に掲載されている話である。しかし、『信長軍記』には採られていない。恐らく『大谷本願寺由緒通鑑』が東派の正統性を主張するものであり、さらに、願正寺も東派の寺院であること等から推して、この話がもともと東派の教化話であったためであろう。右の例は江戸時代前半の説教に東西の派閥拡張競争が反映している一例ともなろう。

以上『信長軍記』には武家門徒や西本願寺側の布教色が強く見られるが、これはそのまま真宗勸化本の初期の特徴の一つであると考えられる。

おわりに

『信長軍記』が真宗勸化本の初期形態を有することを明らかにし、諸本との比較検討を通して勸化本石山合戦譚の成長過程を跡付けてきた。石山合戦譚は東西本願寺の分派抗争や、幕府と教団の間の政治的問題を背景に成長したものである。従って、改派帰参の実態や教団による内容統制、説教僧と武家門徒の関連、或いは未だ報告されていない東本願寺大谷派の勸化本の実態など、避けて通れない問題が多く残されている。これらは今後の課題としたい。

〔注〕

- 1 『信長軍記』（写本一冊）。本書は全文を別稿に翻字する予定である。なお、本稿での引用は読み易いように多少手を加えてある。

- 2 『石山退去録』関西大学中世文学研究会編（上方文庫4所収）一九八六年11月、和泉書院。

- 3 『石山記』(安藤大隆「石山軍鑑——資料紹介——」別府大学国語国文学第31号) 一九八九年12月。なお、『石山記』は外題が『石山軍鑑』であるが本稿では内題を採る。
 - 4 後小路薫「唱導から芸能へ——石山合戦譚の変遷——」国語と国文学62巻11号、一九八五年11月。
 - 5 『陰徳太平記』(『通俗日本全史』第十四卷所収) 一九一二年、早稲田大学出版部。対照表では石山合戦の関連部分のみを取り上げる。
 - 6 文書の所蔵者については、主として谷下一夢「顕如上人傳」一九四一年4月、真宗本願寺派宗務所文書部編纂課、及び越前・若狭一向一揆関係文書資料調査団編「越前・若狭一向一揆関係資料集成」一九八〇年3月、同朋舎に拠った。
 - 7 前掲(注3)論文。
 - 8 『石山記』『石山退去録』『石山軍記高砂録』『石山軍記談林勸考』等他の勸化本にはこうした乱れは見られず、「切利支丹」の語も使われていない。
 - 9 『紫雲殿由縁記』(『真宗全書』第七十卷所収) 一九一三年5月、藏経書院。
 - 10 『道徳法輪集』(『真宗全書』第六十五卷所収) 一九一二年1月、藏経書院。
- 手柄の門徒に対しては、蓮如文書等を小さく切ったもの、あるいは顕如自信の名号(陣中名号)を授与したという。今田法雄「石山戦争裏面史の研究」一九八八年5月、永田文昌堂。79p

(付)

石山合戦を叙述する文献のうち、注に掲げたものの他に本稿で参照した主なものは次の通りである。

- 『石山軍記』(『通俗日本全史』第二十卷所収) 一九一三年12月、早稲田大学出版部。
- 『集古雜編』(『真宗全書』第五十六卷所収) 一九一六年1月、藏経書院。
- 『事書』(『真宗全書』第五十六卷所収) 一九一六年1月、藏経書院。

『本願寺表裏問答』(『真宗全書』第五十六卷所収) 一九一六年1月、藏経書院。

『金鑑記』(『真宗全書』第五十六卷所収) 一九一六年1月、藏経書院。

『大谷本願寺由緒通鑑』(『大日本佛教全書』第六十九卷所収) 一九七二年3月、講談社。

『顯如上人文案』前掲(注5)、『越前若狹一向一揆関係資料集成』所収。

『信長公記』奥野高広・岩沢 彦校注(角川文庫所収) 一九六九年11月、角川書店。

『信長記』神郡周校注(古典文庫58所収) 一九八一年九月、現代思潮社。

『兼見卿記』(『史料纂集』所収) 一九七一年10月、続群書類従完成会。

また、関連する論説は、注で掲げたものの他に以下の諸氏の論がある。

熊田重邦『近代真宗の展開と安芸門徒』(広島女子大学地域研究叢書Ⅳ) 一九八三年3月、溪水社。

青木晃『石山退去録解説』(『石山退去録』) 一九八六年11月、和泉書院。

青木晃『石山合戦の中の靈異譚——『石山退去録』の世界から——』関西大学文学論集、一九八六年11月。

〔付記〕 本稿をなすにあたり貴重な御蔵書の貸与を賜りました後小路薫氏に深謝申し上げます。

A study of The Development of *The Story of the Ishiyama War*

—About Kangebon “Shincho Gunki”—

Terue MIYAZAWA

This paper begins with the introduction of *Shincho Gunki* and then traces its development as “Kangebon” by analyzing its content.

When *Shincho Gunki* was written, *Kennyō Shonin shojo*, *Shuko Zappen*, *Ohtani Honganji Yuisho Tsugan* — all of which were historical materials of Honganji — as well as the historical materials and war stories of Nobunaga were used. The writer of this paper compares them to *Shincho Gunki* and proves that it was *Intoku Taiheiki* that was most closely tied to this book, *The Story of the Ishiyama War*. *Shincho Gunki* used contemporary materials, such as letters and oaths, as well as the imaginative descriptions of wars in *Intoku Taiheiki*. As for the development of “Kassentan” as a story, *exhortations* and war stories were interwoven. First, it was a historical description of war, and then it shifted focus to miraculous stories of *inspiration*. The Shinshu Sect’s claim was withdrawn and the birth of a new hero was reported.